

私の人生を豊かにしてくれた、とても大切な学校

森口 透

大阪文学学校への入学は五十五歳の時の転職が契機だった。神戸の会社で産業機械の設計開発技術者として三十年あまり勤務した私は公募に応募して、一九九七年十月に政治経済専門官として大阪のアメリカ合衆国総領事館に転職した。

この転職で、それまでに比べて自由時間が格段に増えた。超多忙だった会社員時代と違って、毎日五時半には退勤できる。月に一、二度、地域の行事に総領事や領事に随行する以外、土日は完全に休みで日米両国の祝日も休日である。これは私にとって夢のように幸せな変化で、増えた自由時間をどのように使うべきかと真剣に考えたのは当然である。

まず、機械工学を学んだ私は、以前から工学部で学ぶ以上の数学を学びたいと思っていた。そこで、この機会に大学の理学部数学科の夜間部に入学できないかと考えたが、どの大学にも数学科の夜間部はないので、残念ながら諦めた。

何をすべきか思索している中に一年ほどが過ぎ、大阪文学学校のことを知った。夜間部なら通うことができる。子供の頃から読書が好きで、会社員時代も司馬遼太郎、吉村昭、カズオ・イシングロなどの作品を愛読していた。それまで小説も

エッセイも全く書いたことがなかったが、エッセイなら書けるかもしれないと思って入学案内を取り寄せた。

案内書によると芥川賞作家を輩出している学校で、私には難し過ぎるかも知れないと思ったが、駄目なら半年で辞めようとの気楽な気持ちで夜間部の「詩とエッセイ」クラスに申し込んだ。ところが、事務局の菱木紅さん（であることは後で知った）から電話があり、「散文を書きたいのなら小説クラスの方が良い」と言われ、一九九九年四月に私は大阪文学学校の夜間部小説クラスに入学することにした。

クラスは本科の尼子クラスだった。生徒数は十二人でチューターより二歳年上の私が最年長である。二十歳前後の方もいた。その中の一人が今作家として活躍中の藤岡陽子さんである。彼女は当時から必ずプロ作家になると言っていた。

文校に通い始めると、すぐに週に一度の組会の日が何よりも楽しみになった。その時の私はまるで小学生に返ったようだったと思う。組会とその後の「DIP」での飲み会が実に楽しかったのだ。飲み会はたいてい隣の牧川クラスと一緒にだったので、チューターの牧川氏や林氏、佐保木氏ら、牧川クラ

スの人たちとも仲良くなった。

エッセイを書くことが目的であり、組会に初めに提出した二作品はエッセイだった。しかし、若い同級生たちに刺激を受けて、三作目には生涯初の小説を書いてみた。会社員時代に米国に駐在した時の経験を基にした短編だったが全く不評で、尼子氏からは「小説になっていない」とまで言われ、大いに落胆すると同時に「こんなことではいかにではないか」と反省し、初めて小説の書き方の参考書を三冊買った。

専科になつてすぐ、生涯二作目の小説「一ドル銀貨」とエッセイ「アカシア並木沿いの家」が同時に在特号に選ばれた。そして、小説の方を『樹林』に掲載して頂いた。この時のエッセイで後に大阪文学学校賞（佳作）を頂いた。これに氣をよくした私は、二〇〇四年三月までの五年間生徒として大阪文学学校に在籍した。本科と専科は尼子一昭クラスである。研究科の半年は葉山郁生クラスで、研究科の一年半と学友の一年は奥野忠昭クラスだった。

二〇〇四年には奥野先生の指導で、主として奥野クラスの出身者による同人誌『あべの文学』の創刊に携わった。それ以来『あべの文学』に小説とエッセイを発表している。

二〇一四年四月十日の午後、奥野先生から、半世紀もチューターを勤められた飯塚輝一氏の後任のチューターを引き受けてくれないかという電話を頂いた。その年の文校入学式の三日前だった。当時の私は半ば趣味で二社の翻訳会社と契約し英語の翻訳をしていて結構忙しく、年齢も七十二歳に近か

った。能力的にも無理だと思つてすぐにお断りした。しかし、奥野先生に「君なら大丈夫やから考えておいてくれ」と言われ、翌日には「やってみます」と返事をした。若い頃から頼まれると断れないのが私の悪い癖だ。ただ、会社員時代に同志社大学のある教授の依頼で二年間同志社大学工学部の非常勤講師を勤めたことがあり、その時のポジティブな思い出が最終的に私にチューターを引き受けさせたように思う。

朝井まかてさんが二〇一三年下期の直木賞を受賞したことで二〇一四年春期は入学者が多く、森口クラスには十七人の生徒が集まった。土曜日の昼間部で若い人が多く大半が女性だったので、とても華やかなクラスだった。

それでも正直言つて、四月一九日の最初の組会の日、分不相応な仕事を引き受けてしまったと後悔した。ただ、若い人たちの真剣な眼差しを見てみると、非才な私でも期待に応えるために全力を尽くすしかない、と覚悟を新たにしました。

二〇一四年の森口クラスには才能豊かな人が多かった。それだけに、「私がチューターで良いのか」と常に思いながら自分なりに懸命にチューターを演じるしかなかった。

やがて、生徒だった時と同じように、組会の日が楽しみになり、妻から「文校に行く日はいつもとても楽しそうね」と言われるようになった。正午から三時過ぎまでが組会で、その後は必ず「ティファニー」などのカフェで五時頃まで二次会だったので、神戸の自宅に帰るのは、午後七時近くになった。その他、よく夜の飲み会もあった。

二〇一四年だけでなくそれ以降の森口クラスにも才能ある

方が集まったと思う。例えば、二〇一四年組の水野留見さんは、講談社児童文学新人賞を受賞し、二〇一六年組の夏木志朋さんはポプラ社小説新人賞を受賞した。二人とも今は作家としてデビューしている。

また、二〇一四年組の月吹友香さんはR-18文学賞を受賞した。この他、二〇一四年組の平野真由樹さんは文芸賞の最終候補に選ばれ、二〇一六年組の高田智史さんは太宰治賞の何人かとは今も勉強会で交流している。彼ら彼女らはいつか才能を花咲かせると、私は期待し信じている。

私は厳しく批評されることが嫌いなので、チューターになってからは、どの作品もまず良いところを見つけて褒めることを心掛けた。それでも、技術論文に慣れた私は論旨の曖昧な文章には不必要に厳しく、配慮を欠いた発言をしたことがあったのではないかと心配している。

二〇二〇年三月にチューターを辞めさせて頂いた。辞めたのは、二〇一九年の三月に脊柱管狭窄症の手術を受けてその春の大切な入学体験クラスを担当できなかつたので、八十歳までに約二年が残っていたが、健康上の問題でこれ以上文校に迷惑をかけてはいけないと思ったからであった。

最後まで「私がチューターで良いのか？」という疑問と、私の方が生徒の皆さんから教わることが多いな、という思いが残ったままだった。

大阪文学学校で多くの良き人々に出会い、入学する前には

予期しなかつたほど楽しく充実した時間を過ごすことができた。

会社は厳しい競争の社会である。常に利害が絡んでいるので何事につけ本音を言うことは本当に難しい。それに比べ、大阪文学学校では人生や文学について多くの人たちと心を割って話すことができた。職場とは違う素晴らしい異世界を体験できたことが、楽しさの元だったと思う。

生徒として五年間在籍し、チューターとして六年間勤めさせて頂いた大阪文学学校は、私に数多くの良い思い出を残してくださった、とても大切な学校である。

小原事務局長はじめお世話になった関係者の方々に、心よりの感謝を申し上げます。私のエッセイを終わります。(完)